



# 会社を辞めて宮城県に移住、 そして起業 スポーツを通して 子どもたちの生きる力を育みたい

生きていくための力「非認知能力」が教育分野で重視される中、スポーツを通じて非認知能力を育み、子どもたちの成長をサポートしようと会社を立ち上げた原田直信さん。大学卒業後、8年間勤務したロート製薬株式会社を辞め、2021年8月に宮城県女川町に移住しての挑戦です。起業の経緯と思い、そして事業内容や今後のプランまで伺いました。

## 非認知能力の育成をめざす 独自のスポーツプログラム

社名は「つなぐ」。「子どもたちの未来をつなぐ、人と人をつなぐ、の意味です。20秒で決めました」。3歳から大学までサッカーを続けてきたスポーツパーソンらしい快活な笑顔で言う。

事業の柱はスポーツを通じた教育事業だ。1つは女川町と石巻市でのスポーツスクール、2つ目が女川町の委託事業である小学校の放課後スポーツプログラム、3つ目は保育所での「キッズスポーツ」。そのほか産業カウンセラー、キャリアコンサルティングとして学生・起業家の支援活動も行っている。めざすのは、教育分野で注目されている非認知能力の育成だ。学力テストでは数値化されない集中力・判断力・自己肯定感といった人生を豊かにする力で、幼児期・学童期の取り組みが重要だといわれている。

たとえば「キッズスポーツ」では3歳以上を対象に、両足ジャンプなどシンプルな動きを、運動が苦手な子ども障がいのある子どもと一緒に楽しむ。プログラムの特色は、原

どもたちに高校卒業後の進学の夢を支援すべく立ち上がった団体。東日本大震災発生時に何もできなかった後悔が社内公募への背中を押した。「自分が人間関係に悩み、産業カウンセラーの資格を取った経験があるので、子どもたちの力になりたいと思いました」。

仙台で中・高校生に出会い、彼らの悩みがキャリアにあると知ると、キャリアコンサルティングの資格も取得した。「がんばっているけれど自信をもてない、夢があるのに一歩踏み出せない彼らを見て、幼少期に非認知能力を鍛える重要性に気づいたのです。社会が変化し、非認知能力が一層重要になる今後、教員や保育士ではなく、外部の人間がアクションを起こすべきだと考えました」。



田さんが産業カウンセラーとキャリアコンサルティングとして磨いてきたかわり方にある。「叱るときは『ダメだよ』ではなく、なぜダメかを子どもが考えられるかわかり方をします。一人ひとりの目線に合わせて説明すると行動や習慣まで変わってきます。『次はいつ来るの』と言ってくる園児や、『生活習慣が変わった』という保護者の声もあり、手応えを感じています」。東日本大震災から11年。施設などのハード面が整備された反面、運動不足による子どもの血糖値の上昇など問題が顕在化す中で原田さんの挑戦である。

## 子どもたちに必要な事業 会社も理解を示してくれた

「起業なんて考えたことはありませんでした」。新卒でロート製薬に入り、会社員生活を送っていた原田さんを突き動かしたのは、被災地で出会った子どもたちだった。

2019年、入社6年目で公益財団法人みちのく未来基金への出向に手を挙げ、仙台に赴任した。同基金はロート製薬を含む3社が、震災で保護者を亡くした子どもたちを支援する事業として設立された。原田さんは、被災地で出会った子どもたちと関わりができた。「いきなり外部の人間が説得しても無理だとわかっていたので、まず課題を丁寧に聞いてからアイデアを伝えました」。このときに役立ったのが営業職で培ったヒアリング能力や提案力だ。

会社に恩義はあるが、事業を実現したい。退職して女川町に移住する決意は揺るがず、原田さんの本気を会社も認めてくれた。「退職にあたりロート製薬の山田邦雄会長にお目にかかりました。『いつか一緒に仕事することがあるかもしれない。応援している』と温かいことばをいただきました」。

## 大学でのゼミ活動と 部活動が原点にある

なぜ、そこまで他者にエネルギーを注げるのか。原点は大学時代にあると言う。一つはゼミの取り組みでダウン症の子どもたちとかわったこと。まちづくりをテーマに掲げる石川路子教授(当時、准教授)のゼミは地域から学ぶことを重視し、その一環としてダウン症の乳幼児子育てサークルとの交流活動を行っていた。「子どもたちとサッカーやイベントをする活動的なゼミで、社会的に弱い立場の子どもたちのためにできることはないか、と考えるきっかけになりました」。

体育会サッカー部での経験も大きい。「副キャプテンとしてどのようにすれば、各部門員にモチベーションを上げてもらえるか、どういう声かけをしたらいいかをずっと考えていました」。サッカー部のつながりは今

## PROFILE

株式会社つなぐ 代表  
はらだ なおとし  
原田 直信さん

2013年、経済学部卒業。在学中は体育会サッカー部に所属。新卒でロート製薬株式会社に入社。営業職を経て被災地支援の団体に出向。東北の子どもたちのサポートをしたいと退職を決め、宮城県女川町に移住。「株式会社つなぐ」を起業。総合スポーツスクールを開校するなど、スポーツを通じた教育事業を中心にビジネスを展開中。産業カウンセラー、キャリアコンサルティングでもある。



女川町で実施しているプログラムを女川町だけでなく、全国の子どもたちにも届けたいと考えております。子どもたちの生きる力を育むサポートをしたいこの思いだけでここまで突き進んできました。一方、事業を継続・拡張していくには私だけではなく多くの方々のお力が必要だと感じております。もし私の事業に少しでもご興味があり、お力添えいただける方がいらっしゃいましたら、ご連絡いただければ幸いです。連絡先:haradanao0602@gmail.com

も原田さんを支えている。「応援してくださる先輩や人を紹介してくださる方もいて、ありがたいです。近いうちに東北甲南会にも顔を出したいと思っています」。

## 全国の子どもたちに プログラムを提供したい

コロナ禍で子どもたちの体力低下が問題視される中、原田さんの事業は日本中でニーズがあるはずだ。事業拡張には根拠が欠かせず、エビデンスの積み上げを今後の目標に挙げる。

「2022年度からは年間約100回の『キッズスポーツ』を実施予定で、運動能力や学力の変化などデータを収集・分析して研究に取り組みたいと考えています。すでに複数の教育機関から連携したいと声をかけていただいています。保育所でのスポーツプログラムによる非認知能力の研究データは少ないと聞いているので、ぜひ実現したいです」。

現在、社員は原田さんの奥さんだけで、アルバイトのスタッフ数人の構成。今後は幼児教育を学ぶ学生を巻き込んでいく計画だ。「学生にとっても現場を知る機会になるので、良いモデルをつくっていきたくいです。私自身、女川町に来てから自分らしく生きていくことを感じます。日本中の子どもたちにも自分がやりたいことを見つけて、突き進んでほしいと思っています」。原田さんの挑戦を、子どもたちが待っている。

